京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

令和5年　9月　26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　人間・環境学研究科

職 名・学 年　博士後期課程・3年

氏　　名　佐藤 雅也

助成の種類	**令和 5 年度　・　在外研究助成**		
研究課題名	言明行為の哲学理論を評価するためのモデル構築とその応用		
受入機関	オーストリア ウィーン大学（Universität Wien）		
渡航期間	令和5年　6月　1日　～　令和5年　9月　18日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有(　　)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	1,015,000 円	
	使用した助成金額	1,015,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	費目	金額（円）
		宿泊費・滞在費	1,015,000
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。）　在外研究のための助成をいただけたこと、御礼申し上げます。		

成果の概要 / 佐藤雅也

本助成を受けた報告者は、ウィーン大学（オーストリア）に所属し、「言明行為の性質」をテーマとした哲学研究を行った。当地では、心の哲学・言語哲学分野で独自の理論を展開するミカエル・シュミッツ氏との共同研究を主として行った。加えて、哲学研究科主催の講演会やヨーロッパ分析哲学会などにも参加し、多角的に理論を補強する機会を設けることができた。

【背景】

オックスフォードの哲学者、ジョン・オースティンが哲学の俎上に載せたことを契機として、約束や命令といった言語行為、つまり言葉を発することでなされる行為は哲学の対象となった。中でも特に、平叙文を用いて我々が日常的に行う言明行為、つまり何かしらの事柄が成立していると表現する行為は、行為としての典型性ゆえに哲学者にとって高い関心事となっている。何をもって我々は言明していることになるのか。この問に真摯に向き合うならば、言明の 2 つの性質がうまれるからくりを解き明かさなければならない。すなわち、話し手と聞き手の間のコミュニケーションを形作るという性質。そして、真であるか偽であるかのいずれかとなるという性質。現状、言明行為の成立条件の解明を試みる大多数の理論は、いずれか一方の性質のみを分析の土俵に上げるのみであり、他方がいかにして生じるのかについては触れることさえもしない。これは、それぞれの性質が哲学上の別の問題との関連で取り上げられ始め、「コミュニケーション行為としての言明」と「真理値を持つ言明」がいわば別領域の分析対象として扱われるようになったことに起因する。結果的に、前者の言明を対象とする理論同士、後者の言明を対象とする理論同士で優劣を付け合うという状況が生まれてしまったわけである。

【在外研究の目的】

報告者は、言明行為の 2 つの性質を射程に捉えた理論のモデル構築を目指している。個々の性質に焦点を当てた言明行為の理論は数多く存在するが、それらを単純に継ぎ接ぎしたところで十全な理論とはいえない。なぜ他ではない特定の理論同士を組み合わせるのかが不透明なままである。結局のところ、2 つの性質がどう影響しあって一つの言明行為を構築しているのかということまで明らかにして初めてそれぞれの性質についての明確な輪郭を与えることが可能になるのである。報告者が目指すのは、2 つの性質間の関係性を絞りつつ、既存の（それぞれの性質についての）理論の組み合わせに制限を与えることにある。

【成果】

シュミッツ氏との共同研究を通じ、このプロジェクトは大幅に進展することとなった。大局的にいえば、コミュニケーションを構築するという性質は表層的・非本質的な性質である

一方で、真理値はコミュニケーション的性質の前提的な立ち位置にあるとともに、言明にとって内的・本質的な性質であると分析し、2 つの性質の間に階層構造を構築した。このモデルの構築にあたって、シュミッツ氏が理論化する集団的志向性（i.e., 欲求や意図といった、ある対象/出来事に向けられる心の状態、すなわち志向性の中でも、集団そのものが持つとされるもの）の概念を運用することで糸口を見出すことができた。現状では精緻化の余地が残るものの、このモデルを洗練させることで、既に提案された多数の言明行為の理論を正当に評価することができるはずである。

ウィーンでの収穫はシュミッツ氏との共同研究にとどまるものではない。20 世紀に哲学界全体に大きな影響を与えた論理実証主義のスタンスを引き継ぐウィーン学団の集会もさることながら、とりわけヨーロッパ分析哲学会への参加は報告者にとって有意義なものとなった。言語学の世界と哲学の世界を行き来するフリーデリーケ・モルトマン氏や言語行為と内言の関係についての理論を構築するダニエル・グレゴリー氏らの発表は報告者に新たな視点を与えてくれた。また、言語哲学や分析美学といった分野で数々の業績を生み出し続けているマニュエル・ガルシア・カルピンテロ氏による想像性についての発表を聞くことができたこと、同氏と意見を交わし合う機会を持つことができたことは、フィクション作品における言明行為についての理論化を行う上で大きな助けとなった。加えて、20 世紀を代表するプラグマティズムの哲学者であるドナルド・デイヴィドソンおよびウィルフリド・セラーズの弟子にあたり、言語使用についての深い洞察を持つクリストファー・ゴーカー氏との交流は報告者の研究に幅と深みを与えるものとなった。同氏の発表や懇親会での関わり、学会後の継続的な個人的なやりとりを通じ、認識論的様相表現を用いた言明行為を報告者のプロジェクトに組み込む方針を立てることができた。

本助成がなければ、決してこのような進展が現実になることはなかった。この場を借りて御礼を申し上げたい。